

スケッチ法を用いた「理想の食卓」 ー日本とサウジアラビア王国の学生における比較検討ー

003

○長谷川めぐみ^{はせがわ}，市川伸（杏林大学保健学部公衆衛生学教室保健栄養学）

【背景】サウジアラビア王国(以下「サウジ」)から見て日本は、輸出額で第1位、輸入額で第4位の国である。サウジから日本への輸入は鉱物性燃料が大半を占め、我が国にとって最大の原油供給国となっている。また、アラブ最大の市場規模であり中東の新たな拠点として注目を集め日系企業は52社進出している(2009年)。中東諸国のなかで唯一日本との関係が良好といえるサウジはイスラム教の聖地メッカを擁する国で宗教的な側面からも食文化の違いが大きい。日本との良好な関係を継続するために食文化を背景とした食生態を比較検討することは重要と考える。

【目的】本研究の目的は日本とサウジの大学生によって描かれた「理想の食卓」(スケッチ法により描かれた絵画)から、両国の大学生が「理想の食事」に求める事象、食物、環境などについて食生態の要因分析から比較検討し両国の大学生の抱く「理想の食卓」の違いを形成している要因を明らかにすること。

【対象】日本A大学(147人)と、サウジB大学(109人)に在籍する女子大学生合計256人を調査対象とした。

【方法】日本A大学、サウジB大学ともに集合法で、無記名、自記方式で調査票(A4紙)を配布し、「スケッチ法」の説明後、理想の食卓を描いてもらった。調査にあたり事前に両大学の所属長および調査対象者には調査目的、プライバシーの守秘、質問肢の内容(年齢、居住形態)について説明し了解が得られた学生に対して調査を実施した。

また、本調査は杏林大学保健学部倫理委員

会に倫理申請し実施が受理された。

分析方法は描かれている要因を食生態(食知識・食嗜好・食行動・食態度・食環境)の枠組みに位置づけ、出現頻度を要因別に算出し、数値化して両国の比較検討を試みた。調査結果の解析にはSPSS Ver.16を用い、有意差は χ^2 検定、u検定、t検定を行った。

【結果】本調査結果を食生態の枠組みをもとに分析した。食知識、食態度、食行動、食環境の4項大項目においてA大学(日本)とB大学(サウジ)の両国間に有意差がみられた。

食嗜好には有意差がみられなかった。また、食嗜好に着目し、出現した料理の種類を比較したところ、伝統食の出現頻度はA大学(日本)が有意に高く、外来食の出現頻度はB大学(サウジ)が有意に高かった。

【考察】結果より、サウジでは食知識、食態度、食行動、食環境において宗教に関連する要因を確認した。一方、食嗜好における出現料理においてB大学(サウジ)は外来食頻度が有意に高い背景には、サウジの「食の欧米化」が急速に進展している状況が反映していることが示唆された。

また「スケッチ法」は、EBMあるいはEBNに根づいた調査方法や解析方法が確立されておらず、今後の調査研究継続に多くの課題を残した。しかし、本研究においては「スケッチ法」による調査解析の具体的な方法や枠組みを提案したことが示唆された。

(連絡先)

長谷川めぐみ，杏林大学保健学部，
東京都八王子市宮下町476

cecilia@ks.kyorin-u.ac.jp